

ATEM Newsletter

発行 映画英語教育学会
住所 〒169-0075
東京都新宿区高田馬場
4-3-12アルク高田馬場4F
TEL 03-3365-0182
FAX 03-3360-6364
E-mail office@atem.org
郵便振替 00820-3-1477

映画英語教育学会 / The Association for Teaching English Through Movies



Newsletter No. 24 2013. Apr.

本学会における三つのシンカ

会長 角山照彦（広島国際大学）

早いもので本学会は今年で設立 19 年目を迎え、来年はいよいよ 20 周年という節目の年となります。本学会が今後とも着実に発展していけますよう、皆様のご理解とご協力をどうかよろしくお願いいたします。ビジネスの世界では「三つのシンカ」という表現が使われることがありますが、これを本学会に当てはめながら今後の方向について述べてみます。

一つ目は、当然ながら「進化」です。1995 年の学会設立当初は、映画を活用した英語教育自体まだ目新しいものであり、メディアもビデオテープが主流でした。しかし、YouTube などの動画共有サービスを取り入れた授業も当たり前となった現在、本学会も時代の流れに対応しながら次の段階へとステップアップしてゆかなければなりません。具体的には、映画を中心としながらも、海外テレビドラマなど幅広い映像メディアや動画サービスも視野に入れ、研究の裾野を広げていく必要があるでしょう。

二つ目は、「深化」です。研究対象とするメディアの形態が広がろうとも、本学会の中心が「映画」であることに何ら変わりはありません。映画にこだわった、映画ならではの活用法を今後とも追求し、学術研究の質を向上させてゆきたいと思えます。映画については「生きた英語の宝庫」や「動機づけに効果的」とよく言われますが、映画活用の有用性自体は認



めながらも、発話速度や卑語、文法の乱れといった問題や、教材準備の労力などから、授業に映画を取り入れることを躊躇される教員が多いことも事実です。こうした状況を改善するには、授業実践に留まらない実証研究の積み重ねや優れた教材の開発が重要です。

最後は、学術研究団体としての「真価」です。NII 論文情報ナビゲータによる学会紀要のオンラインデータベース化や HP のリニューアル、会員管理システムの導入、優秀論文賞や公式ロゴの創設、5支部体制の構築など、多方面にわたる環境整備を進めてきましたが、学会の本当の価値が問われるのは、やはり学術研究の中心をなす紀要や全国大会の中身であろうと思います。同封の紀要第 18 号や夏の全国大会でそれを確かめて頂きたいですし、是非とも積極的にご自身の研究や実践の成果を全国大会や紀要にてご発表ください。会員一人一人の取り組みが学会全体の活性化、ひいては新しい価値の創造につながってゆくのだと思います。多くの会員の皆様に全国大会にてお会いできることを楽しみにしております。

映画英語教育学会(ATEM)第 19 回全国大会のご案内

日時：2013年8月6日(火) 午前10:00～午後5:30 大会ホームページ：<http://atem.org/taikai/>

会場：相模女子大学（神奈川県相模原市南区文京2丁目1番1号）

第19回大会テーマ：映画英語が創る新しい授業展開

(19th Annual Conference Theme: A New Development in Teaching English through Movies)

大会プログラムの概要 (※研究発表者と題名は、応募者が決定した後でHPにて公開します。)

時間	場所	内容
9:30	マーガレット本館2F	受付開始
10:00		開会式
10:30		ワークショップ（東日本支部企画） 『ハリー・ポッター』で英語の授業 ～小学・中学・高校・大学向け“授業デモンストレーション”
11:10		STEM 特別発表
11:40		総会・昼食
12:40		研究発表 1, 2, 3, 4
13:15		研究発表 5, 6, 7, 8
13:50		研究発表 9, 10, 11, 12
14:25		研究発表 13, 14, 15, 16
15:00		シンポジウム（支部企画）
16:00		特別講演 田中茂範教授（慶應義塾大学）
17:25		閉会式
17:45	マーガレット・ガーデンホール	懇親会

【研究発表の応募について】

研究発表を希望される方は、映画英語教育学会の大会ホームページをご覧になり、募集要項に従ってお申込みください。

応募締切：2013年5月10日(金)

応募資格：ATEM 会員であり、会費を全額(2013年度分を含む)納入していること。

共同発表者も同じ。

映画英語教育学会(ATEM)第19回全国大会ホームページ <http://www.atem.org/taikai/>

特別講演 「映画テキストにおける文法」

講演者 田中茂範 先生（慶應義塾大学教授）

映画の英語を、日常会話の英語という観点から特徴づけ、authentic な映画テキストの中で文法に注目することで得られる学習効果について具体例をできるだけ多く紹介しながら説明します。
language in text という視点を映画英語に適用させる試みです。



●田中茂範先生のプロフィール

慶應義塾大学 環境情報学部 教授

コロンビア大学博士課程(応用言語学)修了、教育学博士

<テレビ講師歴>

新感覚☆わかる使える英文法(2007年4月~2007年9月、NHK教育)

<著書>

『動詞がわかれば英語がわかる』(2010. ジャパンタイムズ)、
『英語感覚が身につく実践的指導 コアとチャンクの活用法』
(2006. 大修館書店)、『認知意味論 英語動詞の多義の構造』
(1990. 三友社出版)、『基本動詞の意味論 コアとプロトタイプ』
(1987. 三友社出版)、その他多数。

ATEM WEB サイトの活用を

ICT 専務理事 新田晴彦（専修大学）

ATEM の WEB サイトは機能が充実してまいりました。
ATEM の活動状況の報告というホームページの役割だけでなく、「会員専用ページ」では次のようなことも可能です。
是非ご活用ください。

1. 全国大会への参加の申込
2. 全国大会の研究発表への応募
3. 紀要への投稿
4. 会費の納入状況の確認
5. メールアドレスや住所などの会員データの
アップデート

全国大会が近づいてきますと全国大会専用のページも
ATEM のサイトからリンクしていますのでご利用ください。



委員会報告

紀要編集委員会

専務理事 塚越博史（北海道医療大学）

まずは紀要「映画英語教育研究」第 18 号にご投稿下さった会員諸氏にお礼申し上げます。昨年より若干多い投稿数であったことを委員会メンバー一同、喜んでいきます。

さて、第 18 号への投稿論文数は 11 編でした。研究論文が 9 編、教育実践報告が 2 編でした。新しく設けられた「研究ノート」への応募はありませんでした。審査の結果、11 編のうち最終的に 8 編が掲載されることになりました。これに加えて STEM からの推薦論文 1 編と特別講演者の論文が掲載され、総数 10 編の論文で発行することとなりました。内容はこれまで以上に多岐にわたるものとなりました。英語教育、ICT、英語学、リメディアル教育、語用論、異文化理解といった分野です。それぞれの論文に対して複数の査読者により審査が行わ

れ、細かな修正コメントが提示されました。その後、それぞれの論文が査読者からのコメントに基づいて修正されました。関係者の皆さんにはこの場を借りてお礼申し上げます。

今後は、さらに質の高い情報を、そしてさまざまな形の情報を発信していくため、論文カテゴリーを増やすことを考えています。教授資料、教材紹介、研究余滴、テーマ論文などがその例です。皆さんからのアイデアもお待ちしています。



既刊号 紀要17号 →

新刊号 紀要 18 号は、4 月上旬に郵送します。

国際交流委員会

専務理事 倉田 誠（京都外国語大学）

国際交流委員会の主な業務は大韓民国の映像英語教育学会（STEM: The Society for Teaching English Through Media）との学術交流を促進することです。その一環として、STEM 国際学会での研究発表者を募り選考することがあります。今回も ATEM の HP 上で STEM 大会での発表希望者を公募しましたところ、下記の 7 名の応募者（単独発表 3 本と共同発表 2 本）がありました。国際交流委員会と理事会の 2 段階の審議の結果、応募者全員を STEM に推挙しました。後日、STEM から全員を快く受け入れる旨のご連絡を受けました。

2013 年の STEM 国際大会は、前会長の李博士の本務校である国民大学（ソウル）で 5 月 11 日（土）に開催されますので、色々な意味で特別な大会になることと存じます。発表された ATEM の会員の方には STEM が刊行する論集に執筆するという道もありますので、国際学会での業績をお作りになろうとお考えの方は今後とも奮って応募してください。応募に関する詳細に関しては、ATEM の HP をご一読ください。

STEM 大会は 2 年前までは 4 月末に開催されていましたが、

昨年から 5 月の GW 明けの土曜日に開催するという方針の変更をされました。この変更は ATEM の会員のために実施して下さいました。つまり、日本の教育界は 4 月が繁忙期であるという点と GW 明けは航空運賃が下がった時期である点をご賢察いただいたものです。

皆さまにはその趣旨をご理解の上、これからでも奮ってご参加いただければ幸いです。そのような我々の積極的な参加が、相模女子大学で開催される 2013 年度 ATEM 全国大会への STEM からの参加を促進することにつながると存じますので、ご一考いただきますようお願い申し上げます。今後とも国際交流委員会の業務をご理解の上、ご協力いただければ幸いです。

記

- ① 井村誠先生（大阪工業大学）& William Figoni 先生（近畿大学）
- ② 大木正明先生（大分工業高等専門学校）
- ③ 小林敏彦先生（小樽商科大学）
- ④ 高瀬文広先生（福岡医療短期大学）& Nikandrov Nikolai 先生（福岡医療短期大学）
- ⑤ 山本五郎先生（広島大学）

広報委員会

専務理事 塚田三千代 (映画・映画英語アナリスト)

広報委員会は、会員個人や他学会員が提供した研究情報ならびに活動を公開することによって、「映画英語教育」ならびに「学術研究」に寄与することを目指して活動を展開しています。本年度は5名の委員(塚田三千代・清水純子・松田愛子・大木正明・横山仁視)がこの業務を担当しました。

2012年度の活動内容の概略は以下です。

- ◇ ATEM「映画英語教育学会」公式サイト管理・編集の更新に協力した。
- ◇ 会報 Newsletter を年2回(4月にNo. 22、10月にNo. 23)発行した。各会員に郵送すると同時に、ATEMのHPでバックナンバーを公開した。
- ◇ HPの「映画と文化」のコーナーでは、新作映画の紹介や映画文化・英語・映画英語教育に関する会員執筆による批評やエッセイ、コラムを公開した。

支部だより

九州支部

支部理事 大木正明 (大分工業高等専門学校)

2013年1月15日をもちまして、九州支部の支部長および副支部長が交代し、新支部長は砂川典子氏(九州ルーテル学院大学)に、また新副支部長は秋好礼子氏(福岡大学)となりました。

九州支部の主な活動は、2012年10月6日(土)の支部大会(福岡医療短期大学)と7月および2013年1月の運営委員会でした。支部大会では、ピアニストの白石景子氏を招き、講演の代わりにイントロ当てクイズ、及び、ミニコンサートを実施しました。イントロ当てクイズでは映画『マイ・フェア・レディ』『雨に唄えば』『崖の上のポニョ』『不思議の国のアリス』など名作のイントロを、ミニコンサートでは、映画『愛情物語』より「To Love Again」と『ルパン三世』の「テーマ」を、それぞれピアノの生演奏で披露していただきました。本企画により、支部大会は予想を上回る参加者で盛会に終わりました。

2012年度は、「ヒューゴの不思議な発明』『グッド・ドクター』『マーガレット・サッチャー:鉄の女の涙』『英国王のスピーチ』『ラビット・ホール』『危険なメソッド』などの批評やコラムを掲載していますので、詳細をHPをご覧ください。



(C)2011 Paramount Pictures. All Rights Reserved

2013年度も皆様のご寄稿を期待いたします。

原稿はEmailでお送りください。

記述は日本語、英文どちらでも構いません。字数1000字。

Email宛先: ej-koho@atem.org

2013年度の支部大会につきましては、会場は福岡大学、日程は10月5日(土)、というところまでは決まっております。皆様の御参加を御待ちしています。詳細を、九州支部HPに掲載していますのでご覧ください。

最後になりましたが、8月開催の東日本支部主催による「映画英語教育学会」第19回全国大会や5月に開催される韓国のSTEM大会で、研究発表の先生方との交流を楽しみにしております。



西日本支部

支部広報委員長 横山仁視（京都女子大学）



↑左から、上條先生、奥村先生、北本先生

◇ 関西支部改め西日本支部としての第10回支部大会を、11月25日(日)に京都外国語大学で開催しました。シンポジウムは「『英国王のスピーチ』徹底活用法」と題して、音声学の視点から上條美和子先生(相模女子大学)が、英国文化論の視点から奥村真紀先生(京都教育大学)が、コミュニケーション学の視

点から北本晃治先生(帝塚山大学)がそれぞれ活用法を提案されました。特別講演では、三熊祥文先生(広島工業大学)が「英語スピーチへの道—ザ・MOT(もっと)アプローチ—」と題してお話していただきました。その他6件の研究発表があり、約80名の参加者を以って盛会に終わりました。

◇ 支部設立10周年を記念して、論文集を6月中に刊行を予定しています。

◇ 支部の特色あるイベントの一つである「第4回映画英語学ワークショップ」を6月1日(土)に京都外国語大学にて開催します。テーマは、「音声学・音韻論で読み解く映画の英語(仮題)」です。

◇ 第11回支部大会を11月23日(土・祝日)に広島国際大学(広島キャンパス)で開催を予定しています。

◇ 支部HPの特色の一つである「映画と英語」のコラムが2006年5月に始まり、2013年2月の掲載分で延べ117編になりました。多義にわたるコラムをHPでご覧ください。

東日本支部

支部長 吉田雅之（早稲田大学）

東日本支部では、2012年11月25日の第3回支部大会総会で若干の役員交代が承認されました。詳細については、後日に東日本支部HPに掲載しますのでご覧ください。

11月の支部大会のテーマは「映画英語教育と異文化理解」で、映画『ヘルプ』『幸せのレシピ』等を利用したシンポジウムや研究発表、そして意欲的な授業の紹介が行われました。講演は谷川建司氏による「占領期のアメリカ映画とアメリカニゼーション」で、ユニークなものでした。

アプローチが異なると、「映画英語」の紹介はここまで多彩になるのかと感嘆してしまいます。思い切って同一の映画を複数の方々が切り口を変えて分析してみたら面白いのではないか、などと有志で考えているところです。テレビドラマを利用した発表も好評でした。

2月10日の例会では、大月敦子氏の司会で、塚田三千代氏の講演「映画史リテラシーとSCREEN ENGLISH」、それに関連して、清水純子氏が「ユニヴァーサル映画の歴史を辿る」、「映画の格付け」、藤田久美子氏が「映画から女性の生

き方を知る」、日影尚之氏が「映画にみる食文化」を発表し、これら4名によるディスカッションとフロアからの意見交換がなされました。時代ごとに映画の風潮が変わり、それに伴いセリフの英語も特徴を変えていきます。個々の映画だけでなく、複数の映画が産み出す「何か」を意識しつつ、それを英語教育に役立てることができる、と思いました。

今後は2013年5月19日の例会へ向けての準備と、8月6日に予定されている東日本支部発足後、初の全国大会主催へ向けて準備を重ねてまいります。皆様はもちろん、新しい会員の方との出会いも楽しみにしております。



北海道支部

支部長(理事) 秋山敏晴 (北海道工業大学)

北海道支部が発足して、1年が経過しました。昨年1月の支部発足を記念して開催された研究会以来、毎月の支部例会で討論や勉強を重ねながら、第18回全国大会では、支部として「台詞・字幕・吹替」に焦点を当てた英語指導の特別発表を行うことができました。その後も支部会は毎月開催されていますが、新たなメンバーの参加もあり、支部会が活性化しつつあるのはうれしい限りです。

そうした中、去る1月12日(土)に第2回の北海道支部大会を開催することができました。

プログラムは、研究発表として、1)「タスク理論に基づいた映画の利用方法の提案—focused task と unfocused task の観点から」白鳥亜矢子氏(北海道医療大学)、2)「医療系英語教育における映画の利用について」北間砂織氏(通訳者/医療通訳者)、3)「映画を利用した異文化理解教育の試み」足利俊彦氏(北海道医療大学)の3本、そして西日本支部から



ら招待発表の「『シェーン』で学ぼう、英語と文化」藤枝善之氏(京都外国語大学・短期大学)・横山仁視氏(京都女子大学)がありました。更に、倉田誠氏(京都外国語大学)からは「穴構文と他の類似言語現象を考える — 語彙的従属化と映画のデータ」と題した講演をいただきました。

参加者からは、「とても内容豊かな研究会であった。」とのコメントを多数いただき、支部会員一同、次年度の支部大会に意欲をかきたてたところです。

中部支部

支部長(理事) 諸江哲男 (愛知産業大学)

2013年1月1日付けで寶壺支部長の任期満了に伴い、新支部長に選出されました諸江です。同時に委員会組織も新たに編成がおこなわれました。支部運営の方針として前年度の内容を相承してゆくつもりです。2012年の最終の運営委員会の決議事項は次のとおりとなっています。

- ◇ 中部支部会員管理システム担当者として亀山太一氏を選出した。
- ◇ 2013年度支部大会で、映画フェスティバルを愛知県私立高等学校主催のサマーフェスタとコラボレーションをおこなう。
- ◇ 2010年中部支部所属となった北陸地方の会員との交流、コミュニケーション等の方法については継続審議となった。
- ◇ 支部研究紀要の投稿規定、出版方法等継続審議とした。
- ◇ 文化庁主催の「著作権セミナー」の報告がなされ、学会運営、教育現場における映画使用について検討した。
- ◇ 支部大会は、2012年7月14日、名古屋国際センターにおいて、第14回映画フェスティバルを実施した。約200名の

参加者があり、ワークショップ、研究発表、映画上映、講演会などが盛況におこなわれた。

◇ 他の活動としては、テキスト作成や出版活動をおこない、支部運営委員の共同事業として、『市民ケーン』を出版した。

今後は、初等教育・中等教育および高大連携授業において外国語授業への映画利用、教授法等の研究活動のさらなる充実を推し進めてゆく予定です。また、新規会員の募集について拡充をはかってゆくことも課題としています。



＜書評＞

『映画英語 授業デザイン集』 ATEM 東日本支部有志
磐崎弘貞（筑波大学教授）

“映画活用ヒントを提示する意欲作、惜しまれる校正不足”

本書は、本学会東日本支部の有志により企画され、学校レベル別（小・中・高・大・一般）に、映画題材を授業で活用するための具体的アイデアを収録した労作である。メインとなるのは4ページを単位とする25種類の授業方法の紹介で、付録として23のテーマ別に授業で活用できる映画が各10本ずつ簡潔な紹介文と共に収録されている。

たとえば本編では、動機づけ、特定場面での口語表現（自己紹介、アドバイス、愛の告白など）、特定の文法事項（仮定法、冠詞など）、特定ジャンルの語彙（音楽、看護、保育など）、異文化理解（結婚観、笑いなど）、特定の学習スタイル（リスニング、音読、パラレルリーディング、レポート・ライティングなど）と言った切り口で、特定の映画タイトルを使用する方法が提示されている。そして、こうした手法に興味を持った場合には、付録編でIT、スポーツ、人種問題、小学生向けといった、テーマ別に分類された映画から好みのものを選択して活用することもできるようになっている。

このように、各学校レベルにおいて、たとえ一部でも映画を授業に取り込むことを考えている教育者にとっては、具体的な授業デザイン例を参考にでき、かつ厳選された映画データベースを利用できる、有用な情報源となっている。

ただし、惜しまれるのは、情報格差を利用したコミュニケーション活動例がほとんど提示されていないこと、教室ですぐ利用できることを意図したワークシートに校正漏れがかなり見られる点である。後者については、以下で気付いた点を列挙しておくので、本書をすぐ教室で活用したい利用者の方には、最低限の注意を喚起しておきたい。

1)句読点コロンの誤用：“A : B”あるいは“A :B”となっているのは、本来“A : B”とすべきもの(Aの直後に空白無しで使用;直後に空白)。2)不適切なカナ表記:situation [スイッチェーション]→[スイッチェーション]アクセントも追加したい。3)非標準的な教室英語指示: Complete the information below. → Complete the sentences below. 4)不適切な英英定義:acquisition: you buy or obtain it for yourself. → the process by which you buy or obtain something 5)非標準的な動詞型:Bill recognizes Bontecou as he is (a potential partner). → ... recognizes Bontecou as (a potential partner). 6)単語の混同: in his hot coco → in his hot cocoa / drink ~ everyday → drink ~ every day (everydayは形容詞、副詞はevery day) 7)数呼応の誤り:Henry and Daisy was waiting... → ~ were waiting...

正誤表は東日本支部事務局や東日本支部HPから入手されるとよいだろう。

＜会員著書の紹介＞

『アメリカ映画と占領政策』

2000. 京都大学学術出版会

谷川建司（早稲田大学客員教授）

敗戦後、占領軍が積極的に用いたものにアメリカ映画があった。Screen, Sports, Sexの三つのSは不満のたまる被占領国民のガス抜きに利用された面もあるが、むしろ、アメリカ映画とは日本人がこれから目指していくべき社会の視覚的イメージそのものであったかもしれない。

占領軍は、厳選したハリウッド映画を「アメリカ映画は文化の泉」の標語の下で大量に提供した。それらはGHQの民間情報教育局の外郭団体兼アメリカ映画輸出協会の日本出先機関であったセントラル・モーション・ピクチャ・エクスチェンジを通じて公開され、例えば偉大な女性科学者を描いた『キューリー夫人』、ファシズムへの戦いを描く『カサブランカ』、復員兵を温かく迎入れる社会を描いた『我等の生涯の最良の年』などは日本の観客に強い印象を残した。逆に、アメリカ社会の問題点を告発したような作品は公開が控えられた。

一方でテクニカラーの『ステート・フェア』にマッカーサー元帥の推薦コメントを付加するなどして日本人の心を掴み、結果的に戦後の日本人の意識に親アメリカ的な意識を植え付けた。つまり、日本の「民主主義化」とは、裏を返せば日本をアジアにおけるアメリカのパートナー国家に作り変えて反共の防波堤にする、つまり「日本のアメリカ化(アメリカニゼーション)」でもあった。

アメリカ映画には、生きた会話表現や、その背景にあるアメリカの文化や社会のあり方を学ぶ教材としての価値がある。だが、それに加えて、個々のアメリカ映画が日本公開時にどのような意識の下で日本人に供されたのかという歴史的な文脈を学ぶことによって、より一層理解が深まるのではないだろうか。ATEMの会員の皆さんにも、ぜひそういった背景を再確認して頂き、教育に役立ててもらえれば幸いである。



編集後記: 全国大会ご案内、委員会報告、支部だより、図書・書評を載せました。次号は10月に発行。(塚田・清水・松田・大木・横山)